

タガログ語の示差的目的語標示*

長屋尚典 (東京大学)・林真衣 (東京大学・日本学術振興会特別研究員 DC1)

1. はじめに

- 示差的項標示とは、有生性や定性などの項の特性やテンス・アスペクトなどの事象の特性によって異なる項のフラッキングやインデクシングがなされる現象である (Witzlack-Makarevich & Seržant 2018)。

1.1. タガログ語の示差的目的語標示

- 項標示の選択に関わる現象として、タガログ語は特異なヴォイス体系をもつ。
 - 行為者ヴォイスを含む4つのヴォイスが形態論的に対立する。
 - 行為者ヴォイスは主節でP項を属格でとる。
- タガログ語は体言化環境の行為者ヴォイス構文でDOMを示す¹ (Himmelmann 2005: 148; cf. McFarland 1978: 157)。 (1) と (2) を参照してほしい。

(1) *ito ang pusa=ng k<um>ain sa daga.*
 PRX NOM cat=LK <AV>eat LOC rat
 ‘This is the cat that ate the rat.’

(2) *ito ang pusa=ng k<um>ain ng daga.*
 PRX NOM cat=LK <AV>eat GEN rat
 ‘This is the cat that ate a rat (the rat).’ (McFarland 1978: 157、形態素境界とグロスを追加)

- 行為者ヴォイス構文のP項の格標示が場所格 (1) と属格 (2) で交替する。
- このDOMは名詞類の中で分裂が見られることが知られている (McFarland 1978)。
 - 人称代名詞と固有人名のP項は必ず場所格で表現される。
 - 一方で、指示代名詞と普通名詞は場所格あるいは属格で表現される。
- このDOMを引き起こす要因には定性が主張されている (McFarland 1978; Himmelmann 2005)。
 - 定ならば場所格、不定ならば属格と分析されている。
 - しかし、その傾向がコーパス研究などで実証されているわけではない。
 - 類型論的な研究が示唆する他の要因も考慮する必要がある。
- フィリピン諸語でDOMがどのように決定されているかは重要である。
 - フィリピン諸語のヴォイス体系の選択要因として「P項が定ならば被動者ヴォイスを使用する」という一般化がある (McFarland 1978, Himmelmann 2005 など)。
 - この一般化は、属格標示のP項は不定であるということが前提になっている。
 - 格標示と定性の対応関係は本当にあるのだろうか?

1.2. 本研究の目的

- タガログ語の体言化節におけるDOMを引き起こす要因を、コーパスに基づいて計量的に分析する。

* 本研究の内容に関して以下の方々から有益なコメントをいただいた: 石川さくら、上野瞭太、佐近優太、周杜海、鈴木唯、谷川みずき、水野庄吾、吉田樹生 (敬称略)。ここにお礼申し上げます。言うまでもなく本稿に残る誤りは全て発表者の責任である。本研究はJSPS 科研費JP21K00522 (代表: 長屋尚典)、JP24KJ0978 (代表: 林真衣) の助成を受けたものである。

¹ 略号一覧: AV-actor voice, GEN-genitive, LK-linker, LOC-locative, NOM-nominative, PRX-proximal.

- 具体的には、分裂文における行為者ヴォイス構文の P 項の格標示がどのような要因によって決まるかを調査する。
 - 項標示が属格と場所格で交替する普通名詞のみを対象とする。
- この言語の DOM は、有生性、修飾表現のタイプという P 項の特性、動作主性、アスペクトという事象の特性によって引き起こされる複合的な現象であることを指摘する。
 - 一方で、先行研究のように定性を DOM の主要な要因とする証拠は得られない。

2. 方法論

- Sketch Engine (Kilgarriff et al. 2014) のウェブコーパス tITenTen19 を用いた。
- コーパス内で CQL を用いて用例を検索した。
 - 格標識の直後に出現している行為者ヴォイス動詞とその P 項を検索した。
 - これは体言化の指示用法が分裂文で使用される環境にあたる。
- 動詞は 15 の語根に限定した。
 - 他動性の階層に沿って (Tsunoda 1985) 3 つの動詞グループで調査する。
 直接影響: *patay* ‘kill’, *sira* ‘break’, *basag* ‘shatter’, *durog* ‘crush’, *sunog* ‘burn’
 接触: *sampal* ‘hit, slap’, *palo* ‘spank’, *suntok* ‘hit, punch’, *hila* ‘pull’, *tulak* ‘push’
 追及: *hanap* ‘search’, *habol* ‘catch up’, *tugis* ‘pursuit’, *sundo* ‘fetch’, *galugad* ‘explore’
- 対象となるデータを選び出した。
 - 人称代名詞、固有人名、指示代名詞が用いられているデータを除いた。
 - 残ったデータから複数の修飾語があるもの、等位接続、タイプミスなどを除いた。
- 対象となるデータは 1,881 例を、以下の点についてアノテートした。

P 項の特性:

- 有生性 (人間、非人間)
 - タガログ語では、固有人名かそうでないかによって異なる項標示を用いる。
- 複数標示の有無 (複数標識なし、複数標識あり)
 - 複数標示は随意的である。
- 定性標識の有無とタイプ (定性標識なし、定標識あり、不定標識あり)
 - 定性標識なし
 - 定標識あり: 指示詞によって明示的に定であることが示されている
 - 不定標識あり: *isa* ‘one’, *anuman* ‘whatever’ などによって明示的に不定であることが示されている
 - 定性の標示は随意的である。
- 修飾表現の有無とタイプ (修飾なし、subcategorizing、selecting、situating)
 - 修飾なし
 - subcategorizing: 形容詞などによって名詞が修飾されている
 - selecting: 数詞や量化詞によって名詞が修飾されている
 - situating: 属格句や場所格句によって名詞の所有者や場所が限定されている
 - 修飾表現のタイプの分類は Croft (2022) を採用しタガログ語に適用した。
 - 複数と定性の標識はここでの修飾表現からは除外している。

事象の特性:

- 動作主性 (意志形、非意志形)
- アスペクト (完結相、未完結相)
- ムード (現実形、非現実形)
 - いずれも動詞形態論の標識から判断することができる。
 - 動詞形態論の標識は Himmelmann (2006) の分析とラベルを使用した。

これらの7つの特性について調査する理由:

- 類型論的に、有生性、数、定性などの項の特性は DAM のよく見られる要因として考えられている (Witzlack-Makarevich & Seržant 2018: 5-7, 9-10)。
 - さらに、定性はタガログ語でも DOM の要因であるとされている。
- 修飾語の有無とタイプが DAM の要因として言及されることはない。
 - しかし、より限定的な指示対象をもつものとそうではないものによって DOM に違いがあるのではないかと予想した。
- DAM を引き起こす要因として、事象の意味論や述語の特性が近年注目されている (Witzlack-Makarevich & Seržant 2018: 14-15, 18-19)。

3. 結果

3.1. 頻度

- 全体では、場所格の方が属格よりも出現する割合が高い (属格 35.8%、場所格 64.2%)。
- 名詞の有生性: 人間の方が非人間よりも場所格で出現する割合が高い。

表 1: 名詞の有生性と項標示の分布

有生性	属格 (N)	属格 (%)	場所格 (N)	場所格 (%)	合計 (N)	合計 (%)
非人間	445	39.3	688	60.7	1,133	100.0
人間	228	30.5	520	69.5	748	100.0
合計	673	35.8	1,208	64.2	1,881	100.0

- 名詞の数: 複数標示がある場合の方が単数標示の場合よりも、場所格で出現する割合が高い。

表 2: 名詞の数と項標示の分布

数	属格 (N)	属格 (%)	場所格 (N)	場所格 (%)	合計 (N)	合計 (%)
複数標示なし	619	36.4	1,083	63.6	1,702	100.0
複数標示あり	54	30.2	125	69.8	179	100.0
合計	673	35.8	1,208	64.2	1,881	100.0

- 名詞の定性:
 - ほとんどの普通名詞は、定性に関する明らかな標識を持たない。
 - 不定標識がある場合に、場所格で出現する割合が低い。

表 3: 名詞の定性と項標示の分布

定性	属格 (N)	属格 (%)	場所格 (N)	場所格 (%)	合計 (N)	合計 (%)
定性標識なし	625	35.3	1,146	64.7	1,771	100.0
不定標識あり	28	50.9	27	49.1	55	100.0
定標識あり	20	36.4	35	63.6	55	100.0
合計	673	35.8	1,208	64.2	1,881	100.0

- 名詞の修飾:

- 定性とは異なり、多くの名詞が修飾を受けている。
- situating タイプの修飾を受ける場合に、場所格で出現する割合が高い。

表 4: 名詞の修飾と項標示の分布

修飾	属格 (N)	属格 (%)	場所格 (N)	場所格 (%)	合計 (N)	合計 (%)
修飾なし	329	43.6	426	56.4	755	100.0
selecting	32	42.1	44	57.9	76	100.0
subcategorizing	100	45.7	119	54.3	219	100.0
situating	212	25.5	619	74.5	831	100.0
合計	673	35.8	1,208	64.2	1,881	100.0

- 動詞の動作主性: 意志形の方が非意志形よりも場所格で出現する割合が高い。

表 5: 動詞の動作主性と項標示の分布

動作主性	属格 (N)	属格 (%)	場所格 (N)	場所格 (%)	合計 (N)	合計 (%)
非意志形	184	58.8	129	41.2	313	100.0
意志形	489	31.2	1,079	68.8	1,568	100.0
合計	673	35.8	1,208	64.2	1,881	100.0

- 動詞のアスペクト: 未完結相の方が完結相よりも場所格で出現する割合が高い。

表 6: 動詞のアスペクトと項標示の分布

アスペクト	属格 (N)	属格 (%)	場所格 (N)	場所格 (%)	合計 (N)	合計 (%)
未完結相	224	28.0	575	72.0	799	100.0
完結相	449	41.5	633	58.5	1,082	100.0
合計	673	35.8	1,208	64.2	1,881	100.0

- 動詞のモード: 現実形の方が非現実形よりも場所格で出現する割合が高い。

表 7: 動詞のモードと項標示の分布

モード	属格 (N)	属格 (%)	場所格 (N)	場所格 (%)	合計 (N)	合計 (%)
非現実形	191	43.9	244	56.1	435	100.0
現実形	482	33.3	964	66.7	1,446	100.0
合計	673	35.8	1,208	64.2	1,881	100.0

- 動詞グループが追及である場合に、場所格で出現する割合が低い。

表 8: 動詞のグループと項標示の分布

グループ	属格 (N)	属格 (%)	場所格 (N)	場所格 (%)	合計 (N)	合計 (%)
直接影響	416	29.0	1,018	71.0	1,434	100.0
接触	19	18.4	84	81.6	103	100.0
追及	238	69.2	106	30.8	344	100.0
合計	673	35.8	1,208	64.2	1,881	100.0

3.2. 統計

- データを混合ロジスティック回帰モデルに当てはめた。
 - 固定効果: 有生性、数、定性、修飾、動作主性、アスペクト、モード
 - ランダム効果: 語根
 - 有意水準は 5%、ダミー変数は属格を 0、場所格を 1 に設定した。

- 結果:
 - 統計的に有意な効果があったのは以下の4つである。
 - 有生性: Pが人間だと場所格をとる確率が上がる
 - 修飾: Pが subcategorizing か situating の修飾語を持つと場所格をとる確率が上がる
 - 動作主性: 動詞が意志形だと場所格をとる確率が上がる
 - アスペクト: 動詞が完結相だと場所格をとる確率が下がる
 - 数、定性、ムードの3つは統計的に有意ではなかった。

表 9: 統計分析の結果

要因	要因レベル	推定値	標準誤差	Z 値	p 値	有意性
(切片)		0.56925	0.45097	1.262	0.206846	
有生性	非人間	基準レベル				
	人間	0.73666	0.16324	4.513	6.40e-06	***
数	複数標示なし	基準レベル				
	複数標示あり	0.13246	0.21207	0.625	0.532229	
定性	定性標示なし	基準レベル				
	不定標示あり	-0.48151	0.33365	-1.443	0.148981	
	定標示あり	0.34330	0.33769	1.017	0.309342	
修飾	修飾なし	基準レベル				
	selecting	0.40133	0.29136	1.377	0.168372	
	subcategorizing	0.84813	0.21836	3.884	0.000103	***
	situating	0.84432	0.13079	6.456	1.08e-10	***
動作主性	非意志形	基準レベル				
	意志形	0.43170	0.16920	2.551	0.010728	*
アスペクト	未完結相	基準レベル				
	完結相	-0.90375	0.15253	-5.925	3.12e-09	***
ムード	非現実形	基準レベル				
	現実形	0.07976	0.18368	0.434	0.664130	

4. 議論

4.1. 場所格が頻度は高い

- タガログ語の DOM では場所格が頻度は高い (場所格 64.2%、属格 35.8%)。
- このことは、主節で用いられる行為者ヴォイス構文の P 項が属格をとることを考えると大きな違いである。

4.2. DOM を引き起こす P 項の特性は定性ではない可能性がある

- 定性については有意な効果はなかった。
 - 不定の標識があると属格をとる割合が高くなったが、その効果は有意ではない。
 - 定標識がついたとしても、定標識がない場合と比べて場所格をとりやすくない。
 - 定性を DOM の要因とする先行研究の主張は支持する証拠は、明示的に定性が示されている項からは得られない。
- 一方で、タガログ語の DOM の要因として有生性がある。
 - 人間だと場所格をとる確率が上がる。
 - 有生性が DOM の要因となっていることは類型論的には驚くべきことではないが、タガログ語でそれを実証したのは本研究がはじめてである。

- さらに、今回新たに修飾表現のタイプを DOM の要因として指摘することができた。
 - より限定的な指示対象を表現する名詞の方が場所格をとる確率が高くなった。

4.3. DOM に事象の特性もかかわっている

- 事象の特性として動作主性とアスペクトの違いがかかわっている。
 - 意志形だと場所格をとる確率が上がり、完結相だと属格をとる確率が上がる。
- タガログ語の DOM について事象の特性が貢献していることをはじめて指摘できた。
 - ヴォイス体系の選択においても、項の特性が要因になっているとされてきた。
 - タガログ語の DOM には項の特性に加えて事象の特性も複雑に関わっているという事実は、同じく項標示の選択にかかわるヴォイス現象にとっても示唆的である。

4.4. タガログ語の DOM の特殊性

- DOM の類型論的研究においては他動性などの統一した観点からの説明が試みられている (Witzlack-Makarevich & Seržant 2018; ワークショップの他の発表)。
- 今回指摘した諸要因は個別言語に特殊な様相を呈する。
 - 項の特性である有生性と修飾語の効果は、より自然ではない P 項が場所格をとる傾向にあると理解できる (cf. Comrie 1989: 128)。
 - 物体でなく有生性の高い人間である P 項や、修飾語がついて限定的な指示対象をもつ P 項は場所格をとる。
 - 一方で、事象の特性である動作主性とアスペクトの効果は言語類型論的研究の予測に従わない。
 - 意志形で場所格が多いなら、同じく他動性が高くなりそうな完結相でも場所格が多いことを予想するが、それは事実と反する。
 - 未完結相で場所格が多いなら、同じく他動性が低くなりそうな非意志形でも場所格が多いことを予想するが、それは事実と反する。

5. おわりに

- 本研究では、タガログ語の体言化節における DOM を引き起こす要因を、コーパスデータを用いて分析した。
- DOM の要因が定性であるという先行研究の説を支持する証拠は得られなかった。
- むしろ、有生性と修飾表現のタイプという P 項の特性、動作主性とアスペクトという事象の特性によって項標示が交替する複合的な現象であることを指摘した。

参考文献

- Comrie, Bernard. 1989. *Language Universals and Linguistic Typology: Syntax and Morphology*. 2nd edn. Chicago: University of Chicago Press./Croft, William. 2022. *Morphosyntax: Constructions of the World's Languages*. Cambridge: Cambridge University Press./Himmelman, Nikolaus P. 2005. The Austronesian languages of Asia and Madagascar: typological characteristics. In Alexander K. Adelaar & Nikolaus Himmelman (eds.), *The Austronesian Languages of Asia and Madagascar*, 110–181. London: Routledge./Himmelman, Nikolaus P. 2006. How to miss a paradigm or two: Multifunctional ma- in Tagalog. In Felix K. Ameka, Alan Dench & Nicholas Evans (eds.), *Catching Language*, 487–526. Berlin: Mouton de Gruyter./Kilgarriff, Adam, Vít Baisa, Jan Bušta, Miloš Jakubíček, Vojtěch Kovář, Jan Michelfeit, Pavel Rychlý & Vít Suchomel. 2014. The Sketch Engine: Ten years on. *Lexicography* 1(1). 7–36./McFarland, Curtis D. 1978. Definite objects and subject selection in Philippine languages. In Casilda Edrial-Luzares & Austin Hale (eds.), *Studies in Philippine linguistics*, vol. 2, 139–182. Manila: Linguistic Society of the Philippines./Tsunoda, Tasaku. 1985. Remarks on transitivity. *Journal of Linguistics* 21(2). 385–396./Witzlack-Makarevich, Alena & Ilja A. Seržant. 2018. Differential argument marking: Patterns of variation. In Ilja A. Seržant & Alena Witzlack-Makarevich (eds.), *Diachrony of differential argument marking*, 1–49. Berlin: Language Science Press.